

# 前世旅行

## 登場人物

- 山瀬美咲(35)主婦  
山瀬 円(7) 美咲の娘  
山瀬亮介(38)美咲の夫  
高橋 鈴 (35)(55)円の前世(高橋源)の妻  
福田綾子(50)(70)『福田酒店』店主  
松村靖子(60)美咲の母  
中島裕也(40)亮介の同僚  
片桐陽子(28)円の担任  
梶原 梓(58)介護施設『キートス』施設長  
坂本 泉(40)美咲の隣人  
坂本 圭(5)泉の息子  
女子A(7)円の同級生  
女子B(7) 〃  
女子C(7) 〃  
市役所職員(40代・男)  
債権者の男(60代)  
うどん屋店員(50代・女)

○北九州の街・全景

T「1995年・北九州」

厚い雲で覆われた空。

洞海湾を囲むように広がる工場地帯。

○ビル解体工事現場・外観

囲いの中には解体中のビル。

騒音と共に作業員達の声が響く。

囲いの外の歩道の一角。

多くの花束や酒が供えられている。

そこに喪服姿で一人佇む高橋鈴（35）。

向日葵を地面に供え、手を合わせる鈴。

立ち上ると愛おしそうに空を見上げる。

鉛色の空。

鈴の頬を伝う一筋の涙。

○東京の街・全景

T「2015年・東京」

抜けるような青空。

スカイツリーの下に広がる街。

○立花歯科医院（外観）

『立花歯科医院』の看板。

趣のあるクラシカルモダンな建物。

○同・待合室

クラシックが流れる落ち着いた雰囲気。  
数人の患者が待っている。

その中に山瀬円（7）の姿。

ソファに座り、膝の上のランドセルを  
机代わりにノートに絵を描く円。

夢中でクレヨンを塗っている。

円が描いているのは、向日葵を抱えて  
微笑む長い髪の女性。

ノートの余白には『鈴』という名前。

○タイトル「前世旅行」

○立花歯科医院・待合室

診察室から出てきて、支払いを済ませ  
る山瀬美咲（35）。

絵に夢中で美咲に気づかない円。  
円の絵を見て眉をひそめる美咲。

美咲「円！ 帰るよ」

円「——あ、おかあ！ 終わった？」

美咲「うん」

円「円も終わった！ ほら！」

大きく口を開けてみせる円。

### ○商店街

ケーキ店から出て来る美咲と円。

美咲の手にはホールケーキの箱。

鼻歌を口ずさみ、楽しそうに歩く円。

円とは対照的に物憂げな表情の美咲。

反対方向から3人組の小学生の女の子

達が歩いて来る。

円「あ！」

美咲「知ってる子？」

円「うん、2組！」

美咲「同じ組？」

女の子達に笑顔を向ける美咲。

美咲「こんにちは」

顔を見合わせる3人組。

一人の子が悪戯っぽい目で美咲を見る。

女子A(7)「へんちゃんのママ？」

美咲「えんちゃん？ あー、あのね、この子、

『えん』って書くけどまどかかって読むの」

クスクス笑いだす女子3人。

眉をひそめる美咲。

ニコニコして3人を見る円。

円「そんなん、みんな、知っちよるよねえ？」

吹きだす女の子達。

女子B(7)「知っちよる！」

女子C(7)「ちよる！(笑)」

女子A「やっぱ、変！」

円「変？」

首をひねる円。

美咲の顔色が変わる。

美咲「ちよつと…：あなた達」

笑いながら散って行く3人。

○マンション『サンハウス』・外観

一般的な中低層マンション。

○同・5階・外廊下

美咲と円が歩いている。

反対側から手を繋いだ坂本泉(40)と、  
坂本圭(5)が歩いてくる。

円「あ！ 圭くん！」

にこやかな笑顔で美咲達に近づく泉。

泉「ちようどよかった！」

美咲「？」

靴から温泉饅頭の包みを取り出す泉。

泉「箱根に行ったから」

美咲「(恐縮して)うちは、いいわ」

泉「そんなこと言わないで」

円に温泉饅頭を手渡す泉。

美咲「いつも頂いてばかりで——お返しできなくて」

泉「大したもんじゃないわ。お返しなんて(笑)」

美咲「でも……うち、出かせないし」

泉「山瀬さんとこのご主人は忙しいもの」

美咲「土日も出勤が多くて——坂本さんところが羨ましい。圭くん、幸せよね」

泉「うちのは家でじっとするのが苦手なのよ。

つきあう方も大変よ(笑)」

温泉饅頭を掲げる円。

円「おかあ、これ、もらってもいい？」

しぶしぶ頷く美咲。

美咲「いつもごめんね。円、ありがとうは」

円「ありがとう!!」

泉「どういたしまして」

美咲「あ、よかったら、うちでお茶でも」

泉「ありがとう。でも——」

圭「バーベキュー行く!」

美咲「バーブ……あ、バーベキュー?」

圭「うん!」

泉「これから主人の会社の親睦会なの」

美咲「そう」

円「おかあ、バーベキューって、なん?」

圭「外でお肉を焼くんだよ!」

円「外で？　すごいねえ！」

圭「うん！　おいしーいよ！」

円「円んちも、ごちそうなんよ！」

泉「そうなの？」

円「パパの誕生日！」

泉「じゃあ、夜は誕生パーティだ」

円「うん！　まあいいケーキも買った！」

身振り手振りで楽しそうに泉と話す円。

その様子を沈んだ顔で見つめる美咲。

### ○同・山瀬家・外観

「YAMASE」の表札。

### ○同・子供部屋

ピンクで統一された女の子らしい部屋。

壁には円が描いた絵が貼られている。

向日葵を抱えた長い髪の女性の絵や、

天使の絵など様々。

机に向い、画用紙に絵を描いている円。

画用紙には眼鏡をかけた男性の絵。

○同・LDK

テーブルでノートパソコンを開く美咲。

傍らには輪廻転生に関する本。

真剣な顔で検索をする美咲。

検索項目は『子供の問題行動』

食い入るように画面を見つめる美咲。

美咲「（呟く）夫婦仲の悪い家庭では子供の情緒が不安定になり……」

部屋に鳴り響くチャイム。

○ドアホンの画面

画面に映る片桐陽子（28）の顔。

○同・山瀬家・LDK

テーブルにつく陽子。

お茶と饅頭を出し、向いに座る美咲。

陽子「突然、すみません。何度かお母様の携帯にお電話を差し上げたんですが……」

美咲「あ……すみません。歯医者に行った時に音を消したままでした」

陽子「いえ」

美咲「あの……懇談会は来週でしたよね？」

陽子「あ……はい」

気まずそうな顔の陽子。

テーブルの隅に重ねてある『輪廻転生』

の本をチラッと横目で見る陽子。

慌てて本を片付ける美咲。

陽子「実は円ちゃんのことので気になることが

あったものですから」

美咲「円の？」

陽子「これなんですけど」

鞆から丸めた画用紙を取り出し、美咲に手渡す陽子。

画用紙を広げる美咲の顔が強ばる。

そこに描かれているのは、首や胴体を切り離された人間が、煮えたぎった大きな鍋の中に放り込まれている様子。

美咲「これ、円が？」

陽子「はい。図工の時間に描いたものです」

画用紙を持つ手が小刻みに震える美咲。

美咲「どうしてこんな絵を——」

陽子「円ちゃんに悪気はないんです。こういう絵を描く子はたまにいます。ただ……」

陽子の顔を不安そうに見つめる美咲。

### ○(回想)小学校・1年2組・教室内

休み時間の喧騒。

幾人かのグループになり遊ぶ子供達。

一人、机に座り夢中で絵を描く円。

ノートに描いているのは天国の絵。

周りのことは気にならない様子の円。

円を遠巻きに見てニヤニヤする女子達。

陽子の声「円ちゃん、休み時間には一人で絵を描いていることが多くて」

### ○元山瀬家・LDK

陽子と話をしている美咲。

美咲「幼稚園の頃からそうでした。あの子、絵ばかり描いて、友達と遊ばないんです」

陽子「私はそれが悪いことだとは思いません。」

円ちゃんの個性なので」

美咲「でも……」

陽子「ただ、お気づきかと思いますが、円ちゃん、よく天国の話をしませよね？」

美咲「——はい」

陽子「この絵も、天国にいた時に雲の隙間から見えた地獄を描いたと言うんです」

美咲「——地獄」

溜息をつきながら絵を見つめる美咲。

陽子「想像力が豊かなのは素晴らしいことです。ただ、そのせいで他の子供達から『嘘つき』とからかわれるようになって——」

美咲「円、虐められてるんですか？」

陽子「いえ、まだそこまでは——あと、円ちゃんの方言ですが」

美咲「方言？ あ……はい」

陽子「それも子供達のからかいの対象になっているようです」

美咲「実は今日、からかわれているところを目にしました。先生に報告しようかどうか

迷ってたんです」

陽子「そうでしたか」

美咲「円があんな訛った言葉を使うから……」

陽子「いいえ。それに関しては、円ちゃんは何も悪くありません。方言をからかうなんて、絶対にしてはいけないことです」

沈んだ表情で陽子の話を聞く美咲。

陽子「子供達には、きちんと指導していきま  
す。ただ、今の状況を、一応お母様のお耳  
に入れておいた方がよいかと思っただもので」

美咲「わざわざありがとうございます」

陽子「すみません。お母様が心配になるよう  
な話ばかりして——でも、私、円ちゃんの  
話は面白くて大好きなんです」

美咲「話？」

陽子「九州の食べ物の話とか——北九州では  
鶏肉を『かしわ』って言うんですね。折尾  
駅のかしわうどん、私も食べてみたいです」

美咲「折尾駅の……かしわうどん？」

眉間に皺を寄せる美咲。

リビングのドアを開け、入ってくる円。

円「あ！ 陽子先生！」

陽子に駆け寄る円。

何事もなかったように円に微笑む陽子。

円「どしたん？ なんでおると？」

陽子「先生ね、円ちゃんのパパとお話が出来なくて。でも、もう終わったから帰るところ」

円「また来る？」

陽子「来てもいい？」

ニコリ笑う円。

円「うん！」

2人の様子を見つめる美咲の曇り顔。

### ○オフィス街・全景（夕）

夕焼けに赤く染まる東京タワー。

オフィスビルが立ち並ぶ。

### ○湊鉄鋼株式会社・外観（夕）

ガラス張りのオフィスビル。

『湊鉄鋼株式会社』の表札。

○同・廊下（夕）

会議室に続く廊下。

足早に会議室に向う山瀬亮介（38）。

亮介の胸ポケットからバイブの音。

スマホを取り出す亮介。

『美咲』の表示に舌打ちをする亮介。

亮介「もしもし」

美咲の声「もしもし、亮さん？」

亮介「何だよ？　今から大事な会議なんだ」

○山瀬家・廊下（夕）

電話をしている美咲。

リビングのドアを少し開け、テレビを

見る円を気にしながら話している。

美咲「今日、早く帰って来て欲しいの」

亮介の声「は？　今週は忙しいから、飯もい

らないって言ったよな？」

美咲「大事な話があるの。今日ね——」

切れる電話。ツーツーという音。

美咲「！」

○湊鉄鋼株式会社・廊下（夕）

電話を切り、大きく溜息をつく亮介。  
そこに通りかかる中島裕也（40）。

中島「どうした？」

亮介「いや……嫁から」

中島「大丈夫か？」

亮介「ああ。会社にはかけてくるなって言っているのに……つたく！」

胸ポケットにスマホを入れ、腕時計を見る亮介。

亮介「あ、いけねえ。始まる！」

会議室に走る亮介。

亮介の後ろ姿を見つめる中島。

○マンション『サンハウス』・外観（夜）

各部屋に灯りが灯る。

○同・山瀬家・LDK（夜）

テーブルに誕生日ケーキを置く美咲。  
不思議そうにその様子を見ている円。

美咲「今日のご飯はこれだから」

円「え？ おとう、まだ帰って来んよ」

美咲「遅くなるから要らないんだって。2人で食べちゃおう」

円「でも…おとうのケーキやん」

美咲「いいの！ 切るよ！」

ナイフで乱雑にケーキを切る美咲。

『お父さんお誕生日おめでとう』と

書かれたプレートが真っ二つになる。

円「あー！」

× × ×

ケーキを食べる美咲と円。

クリームで汚れている円の口の周り。

美咲「ねえ、円」

円「なあん？」

美咲「折尾駅のかしわうどんなんて食べたことないよね？」

円「あるよ！」

美咲「いつ？」

円「ずーっと昔。3番ホームにあるんだよ」

美咲「昔って……折尾駅は北九州にあるんだよ。お母さん、行ったことないよ」

円「おかあとじゃないもん！」

美咲「じゃあ誰と？」

円「鈴！」

美咲「鈴？」

円「うん！」

美咲「（眉を顰め）円がよく描いてる髪の毛の長い女の人のこと？」

円「うん！」

美咲「でも、鈴さんって円の空想の人よね？」

円「空想の人っち、なあん？」

美咲「現実にはいない人のこと」

円「おるよ！」

　　厳しい視線を円に向ける美咲。

美咲「いないんだよ！　円の勘違い」

円「おる！　円が生まれる前の話やもん！」

　　円を睨む美咲。

美咲「円がそういうことばかり言うから、皆から嘘つきと思われるんでしょ！」

円「嘘ついてないもん！ 本当やもん！」

美咲「その言葉も変だよ。今日も笑われてたでしょ？ みんなと同じ言葉を使ってよ」

円「ヤダ！ 生まれる前から使いよるもん。笑われたっていい！」

美咲「またそんなこと——」

円「ホントのことやん！」

美咲「いいかげんにして！ お願いだから、普通の子になってよ！」

円「普通やもん！」

口を尖らせ、ケーキを頬張る円。

円のケーキ皿を取り上げる美咲。

美咲「嘘つきはもう食べたらダメ！」

大声で泣きだす円。

### ○夜空（夜）

形の良い三日月が浮ぶ。

### ○湊鉄鋼株式会社・外観（夜）

3階の窓に電気が点いている。

○同・3階フロアー（夜）

壁の時計は10時。

ワンフロアーが部ごとに分かれている。

点在して残業をする数人の社員達。

技術部のプレートの下、険しい顔で

パソコンに図面を描く亮介。

眼鏡を外し、目頭を押さえる亮介。

フロアーに入ってきて来る中島。

中島「お疲れ！」

亮介「おう、中島」

中島「差し入れ」

亮介の机に缶珈琲とたこ焼を置く中島。

亮介「お、サンキュー！」

包装を開け、たこ焼を頬張る亮介。

亮介「あれ、お前、歓送迎会は？」

中島「今、終わったとこ。2次会はパスした」

亮介「そうか」

中島「まだお前がいるだろと思って」

亮介「腹減ってたんだ。助かったよ」

中島「お前、大丈夫か？」

亮介 「ん？ 身体なら問題ない」

中島 「家だよ」

亮介 「家？」

中島 「毎日残業だろ？ 土日も出てるみたいだし。奥さん何も言わないか？」

亮介 「ああ……でも、仕方ねえよ」

中島 「お前、完璧を求めすぎんだよ」

亮介 「性分だからな」

中島 「そんなんじや、どんどん仕事が増えるぞ。人に任せられるところは任せろ」

亮介 「自分でやらないと気がすまないんだ」

中島 「家庭があるんだぞ。少し考えろ」

亮介、真顔で中島を見つめ、

亮介 「……なあ、中島」

中島 「ん？」

亮介 「結婚って何だろな？」

中島 「はあ？ それ、俺に聞く？」

亮介 「あ……すまん」

中島 「俺だってわかんねえよ」

亮介 「——だよな」

中島「ただ……」

亮介「？」

中島「無性に子供に会いたくなることがある」

亮介「悪い。変なこと聞いて」

中島「いや、お前も気をつけろよ。夫婦はこ

じれたら厄介だぞ」

亮介「ああ」

中島「さて、と……邪魔したな。じゃあな」

亮介「ああ、ありがとう」

帰って行く中島の背中を見つめながら、

爪楊枝でたこ焼をつつく亮介。

亮介「(呟く)こじれる……か」

大きな溜息をつく亮介。

○『サンハウス』・エントランス（深夜）

コンビニ袋を下げ、疲れた様子の亮介  
が帰って来る。

○同・山瀬家・玄関・中（深夜）

鍵を開け、入って来る亮介。

玄関の電気を点ける。  
寝静まっている家の中。

○同・LDK（深夜）

入ってくる亮介。

キッチンの方で人の気配を感じる。  
不機嫌な顔になる亮介。

亮介「遅くなるって言ったろ」

亮介、キッチンの電気を点ける。

亮介「！」

冷蔵庫の前に立っているのは円。

亮介を見てニッコリ笑う。

亮介「——円。まだ起きてたのか？」

円「うん」

亮介「もうすぐ12時だぞ。どうした？」

円「えつとね、はい、これ！」

円、丸めた画用紙を亮介に手渡す。

亮介「ん？」

画用紙を受け取り、開く亮介。

眼鏡をかけた背広姿の亮介の似顔絵と

『おとうさん、おたんじょう日おめでとう』の文字。

亮介「あ、今日——忘れてた。円覚えてたの？」

円「うん！ 忘れちゃダメやん！」

円の目線に合わせてしやがむ亮介。

亮介「ありがとう円。大事にするよ」

円、満面の笑み。

円「でも、ケーキ食べちゃった。ごめんね」

亮介「大丈夫。これがあるから」

コンビニの袋から缶ビールを取り出

して円の頬につける亮介。

円「つめたい！」

顔を見合わせて笑う亮介と円。

次の瞬間、大きな欠伸をする円。

亮介「ほら、もう寝な。明日起きれないぞ」

円「うん。おやすみ、おとう」

亮介「おやすみ」

円の頭を撫でる亮介。

欠伸をしながら部屋を出て行く円。

にやけた顔で絵を見る亮介。缶ビール

を飲みながらダイニングに移動する。  
テーブルのメモに気づく亮介。  
メモを手に取り、目で読む亮介。  
『土曜日の夜、話があります。美咲』

### ○都営住宅・全景

鉄骨の建物が並ぶ。  
ポツポツと降り始める雨。  
団地の中の歩道を足早に歩く美咲。

### ○同・松村家・玄関・外

『松村』とマジックで書かれた表札。

### ○同・茶の間

小ざっぱりと整理された質素な部屋。  
壁に貼ってある介護施設のシフト表。  
部屋の隅の小さな仏壇には美咲の父  
親（享年40）の遺影。  
思いつめた顔で手を合わせる美咲。  
その背中を見つめる松村靖子（60）。

○外の景色

雨が激しくなり、木々の葉を揺らす。  
遠くの方で雷鳴。

○松村家・茶の間

扇風機を調節し、美咲の前に座る靖子。

靖子「今日は蒸すねえ」

美咲「突然ごめん。仕事大丈夫だった？」

靖子「遅出だったから」

美咲「よかった」

美咲の目を見つめる靖子。

靖子「何かあった？」

美咲「……あのね、母さん」

靖子の顔に緊張が走る。

美咲「私が円くらいの時、どんな子だった？」

靖子「何で？」

美咲「ちよつと知りたくて」

靖子「(ホツとして)何を言うかと思えば」

美咲「ごめん」

靖子「どんな子って。ちょうど円と同じ年の

頃だよ。お父さんが亡くなったのは」

美咲「そうだね」

靖子「私が働きに出なきやいけなくなったから、家のことをよく手伝ってくれて……いい子だったよ」

美咲「——母さんの苦勞を見てたから」

靖子「あんたには随分辛い思いをさせて」

美咲「そんなこと……」

靖子「あの頃の美咲と円はよく似てるよ」

美咲「ホント？ 例えば？」

靖子「天真爛漫で無垢なことか」

美咲「他には？」

靖子「明るくて物怖じしないことか」

美咲「——ねえ、母さん。私、その頃、前世の話なんかしたことがある？」

靖子「前世？ 前世って生まれる前のこと？」

美咲「そう」

靖子「いや……覚えがないけど」

美咲「ならいいの」

美咲を見つめる靖子。

靖子「円が前世の話をするの？」

美咲「……（頷く）」

笑い出す靖子。

靖子「円はまだ子供だよ。子供ってのは、そ

ういう不思議な話が好きなんだよ」

美咲「違うの」

靖子「え？」

美咲「あの子、おかしいのよ」

靖子「おかしい？」

### ○小学校・一年二組・教室内

休み時間の喧騒。

幾人かのグループになり遊ぶ子供達。

机で一人、夢中で絵を描く円。

周りのことは気にならない様子の円。

美咲の声「円、前世の絵ばかり描いて、友達と遊ばないの。社会性に欠けるっていうか」

### ○松村家・茶の間

激しくなる雨音。

美咲の話をも鼻で笑う靖子。

靖子「社会性って……円はまだ一年だよ。」

そんなものは今から育つのよ」

強く頭を振る美咲。

美咲「親だからわかるの。あの子、明らかに他の子と違う。現実と空想の境目がわからないみたいなの」

靖子「想像力が豊かなだけよ。そのうち普通になるよ」

美咲「ううん。円ね、頭がおかしい子だって、小学校でからかわれてるみたいなの」

靖子「苛められてるのかい？」

美咲「……」

泣きだす美咲。

美咲「——私、あの子がお腹にいる時に何かおかしいことをしたかな？」

靖子「何言ってるの」

美咲「あの子の訛り、前から気づいてたのに、可愛いから、そのままにしてたの」

靖子「母さんは好きだよ。円の喋り方」

美咲「私、間違ってた。ちゃんと注意してあげなかったから、どんどん変になって」

靖子「亮介さんは何て言ってるの？」

美咲「話をしてない」

靖子「どうして？」

美咲「毎日遅くて。話をする時間もないの」

靖子「相変わらず忙しいんだね、亮介さん」

美咲「あの人が大事なのは仕事だけなのよ。」

家族なんて面倒なだけだって思ってる」

靖子「そんなことないだろ？ 円の話は可愛がってるじゃないか」

美咲「卒園式や入学式も来ないのよ。都合のいい時だけ可愛がるの。あの人にとって、

円はペットなのよ」

靖子「そんなこと……。ねえ、美咲、あんた達大丈夫なの？」

美咲「……（泣く）」

靖子「円がおかしな話をするのも、夫婦がうまくいってないからじゃないの？」

美咲「……それも原因の1つかもしれない」

靖子「だったら仲良くしなさい」

美咲「……」

靖子「よく考えてごらん。あんたが今、どれ

だけ恵まれてるか」

美咲「それはわかってる」

靖子「じゃあ、亮介さんを立てなさい。そし

たら円もきつと落ち着くよ」

何か考える様子の美咲。

美咲「私達、夫婦でいる意味があるのかな」

美咲を睨む靖子。

靖子「いいかげんにしなさい！　そういうこ

とは絶対に口にしちやダメだよ！」

美咲「……」

靖子「わかったね」

美咲「……」

ガラス窓に打ちつける雨の音。

○マンション『サンハウス』・全景(夜)

各戸に灯る灯り。

○同・山瀬家・円の部屋(夜)

円を寝かしつける美咲。

寝息をたてる円。

天使のような寝顔。

そっと部屋を出る美咲。

○同・LDK(夜)

テーブルにノートパソコンを広げ、設

計図を作成している亮介。

入って来る美咲。

美咲「寝たわ」

亮介「ああ」

パソコンの画面を見つめたまま、マウ

スを動かす亮介。

美咲「大事な話なの。パソコン閉じて」

亮介「急ぐ資料なんだ。話はちゃんと聞いて  
るからいいだろ」

美咲「閉じるまで話さない！」

亮介を睨む美咲。

気怠そうにパソコンの蓋を閉じる亮介。

亮介 「閉じたぞ。早く言えよ」

面倒くさそうな視線を美咲に送る亮介。

美咲 「円のことなんだけど」

亮介 「円の？」

美咲 「この前、担任の先生が来たの」

亮介 「家にか？」

美咲 「(頷き)これを」

画用紙を亮介に渡す美咲。

それは円が描いた地獄の絵。

眉をひそめる亮介。

亮介 「——これ、円が？」

美咲 「図工の時間に描いたんだって」

亮介 「たまたまだろ？ 子供はそういうことに興味がある時期があるのさ」

美咲 「円、地獄を見たって言ってるらしいの。

それが原因で嘘つきって、クラスでからかわれてるんだって」

亮介 「苛められてるのか？」

美咲 「まだそこまではいってないみたいだけど……あの子、言葉も変でしょ？ 一つに

はそれもあるみたい」

亮介「テレビに出てる芸人の真似してるんだろ。すぐやめさせろよ」

美咲「簡単に言うけど、円が嫌だって言うの」

亮介「嫌だって言ったって、それを理解させるのが母親の役目だろ」

画用紙をテーブルに放り投げる亮介。

ムスツとする美咲。

美咲「あの子、前世の記憶があるらしいの」

亮介「前世？」

美咲「そう。方言はその頃に使っていた言葉だからやめないうって」

亮介「は？ 何だよそれ！」

美咲「生まれる前のことを覚えてるらしくて、北九州に住んでたことがあるって、担任の先生にも言ってるのよ」

亮介「北九州？ なんてそんな嘘を……」

美咲「円は本気なの。調べてみたんだけど、前世を覚えてる子って他にもいるらしいの」

亮介「は？ ばかばかしい！」

美咲「ちゃんと聞いてよ！ 円の言ってることも嘘とは言い切れないのよ」

亮介「おい、おい」

美咲「担任の先生に折尾駅の『かしわうどん』の話をしてるの。ネットで調べたら、確かに折尾駅の名物なの」

亮介「どうせ、テレビの旅番組で見たんだろ。

子供の言葉を真に受ける君の方がおかしいよ——もういいかな」

パソコンを開く亮介。

美咲「ちよつと。話はまだ終わってないわ！」

亮介「はあー、まだあるのかよ」

美咲「両親が不仲だと子供が虚言癖を持つことがあるんだって」

亮介「虚言癖？」

美咲「私達の仲が悪いから、そのせいである子の心が歪んだのかもしれない」

亮介「円を精神病みたいに言うなよ。君の育て方に問題があるんじゃないのか？」

○同・子供部屋（夜）

ベッドでぐっすり眠る円。

○同・LDK（夜）

亮介を睨む美咲。

美咲「酷い！ 私の育て方のどこが悪いのよ」  
亮介「そうやってすぐヒステリーを起こすだ  
ろ？ そういうところが原因だろ」

美咲「何よ！ 自己中のあなたにそんなこと  
言われたくないわ！」

亮介「何だと！ 誰に食わせてもらってる  
と思ってるんだ！ 謝れ！」

美咲「嫌よ。私、悪くないもん！」

○同・子供部屋（夜）

美咲と亮介の罵声が聞こえてくる。  
目を覚ます円。目を擦り、起き上がる。

○同・LDKに続く廊下（夜）

美咲と亮介の大声が響いている。

子供部屋から出てくる円。目を擦りながら、リビングに向う。

○同・LDK（夜）

掛け時計の針は9時。

ドアを少し開け、中を覗く円。

言い争いを続けている美咲と亮介。

円が見ていることに気づかない2人。

亮介「俺は家族を養ってるだろ！」

美咲「私だって家のことをやってるわ！」

亮介「お前は大事なこととしてねえだろ？」

美咲「お前って言わないでよ！ お前って言

われるの、だいつ嫌いなんだから！」

睨みあう美咲と亮介。

リビングに円が入ってくる。

円「喧嘩せんで！」

ハッとして振り返る美咲と亮介。

円「何で喧嘩すると？」

責めるような瞳で亮介と美咲を見る円。

美咲「——円」

円「なんで？　ねえ、おとう」

亮介「……お母さんは、お父さんのことが嫌いなんだ。お父さんも、もう限界だな」

円「えっ！」

美咲「そんなこと言ってないでしょ」

亮介「本当のことだろ！」

× × ×

向い合う亮介と美咲。美咲の隣に円。

しゃくり上げて泣く円。

円の涙をタオルで拭く美咲。

その様子を見つめる困惑した顔の亮介。

亮介「円、もう泣くな。あんまり泣くと、ゲが出るぞ。な？」

泣きやまない円。

美咲「円、泣きやみなさい」

円「(しゃくり上げ)おかあは、おとうを好き？」

亮介「——それは……」

更に大声で泣く円。

亮介を睨む美咲。

罰が悪そうな亮介。

亮介「円、何か欲しい物ないか？ 何でも買ってやるぞ。だから泣きやめ、な？」

美咲「ちよつと、物でつるつもり？」

亮介「人聞きの悪いこと言うなよ。俺は……」

泣きやむ円。

円「何でも？」

亮介「ああ！ 何がいい？ 人形か？ ゲー

ムか？ あ、絵具のセットはどうだ？」

大きな瞳をクリクリさせる円。

円「じゃあ、旅行！ 家族で旅行に行きたい！」

亮介・美咲「旅行!？」

円「うん。圭くんとこはいつも行きよる！」

美咲「そうだね。いつもお土産もらって、楽

しい話ばかり聞かされて——」

不憫そうに円を見つめる美咲。

亮介「旅行か。ちよつとそれは……」

円「おとう、何でもいっちゃん言ったやん！ 嘘

なん？ 嘘ついたん？」

亮介「……いやあ、嘘じゃないけど」

円「じゃあ、旅行に行きたい！ 学校のみんな

なも夏休みは家族で旅行に行くつち言い  
よった。円だって行きたい！」

美咲「どうするの？」

亮介「どうするって、仕事が……」

美咲「また仕事に逃げるんだ」

亮介「しょうがないだろ！ 第一、俺達が仲

良く旅行出来ると思うか？」

美咲「それは……」

円「円、北九州に行く！」

美咲・亮介「北九州!？」

円「うん。鈴に会いたい！」

顔を見合わせる美咲と亮介。

### ○夜空(夜)

月にかかる雲。

### ○山瀬家・LDK(夜)

掛け時計の針は10時。

円の顔を怪訝そうに見つめる亮介。

亮介「円の話はわかったけど、今の話は円が

見た夢の話だよな？」

円「夢やないよ！ 円が生まれる前の話！」

亮介「生まれる前って……」

ドアを開け入って来る美咲。

手に数枚の画用紙を持っている。

美咲「剥してきたよ。これでしょ？ 鈴さん」

美咲、数枚の画用紙をテーブルに置く。

鈴と名前の入った、長い髪の女性の絵。

円「そう！ これが鈴！ 源の奥さん！」

眉をしかめ、画用紙を手取る亮介。

亮介「円、鈴さんの苗字は？」

円「苗字？」

美咲「円は山瀬円でしょ？ 山瀬が苗字よ」

円「わからん。でも鈴と源の漢字は書ける」

シメシメという顔つきになる亮介。

亮介「困ったな。名前が書けても、苗字がわ

からないと捜しようがないぞ」

円「でも……でも捜す！」

亮介の目を見つめる円の真直ぐな瞳。

円の純粹な視線に目が泳ぐ亮介。

亮介「——ちよつと整理しよう」

メモ紙に人物表を描きだす亮介。

鈴と源を横線で繋ぎ、夫婦と書く。

亮介「円の話を整理すると、源さんは20年前に事故死した……で、円はその源さんの生まれ変わりだって言うんだな？」

円「うん。天国に行つて、その後、円に生まれ変わった」

源「円と描いた後、首を捻る亮介。」

亮介「その、生まれ変わりつていうのが、お父さんにはよくわからないんだけど」

円「違う人になって生まれること！」

亮介「それはわかるけど。他の子供はそんなこと言わないだろ？ どうして円だけ生

まれ変わる前のことを覚えてるんだ？」

円「わからん。でも、天国でも、ずっと鈴のことを忘れんように考えとつた」

美咲「円は夢を見たのよ」

首を横に振る円。

円「違う！ ちゃんと覚えとるもん！」

美咲「生まれる前のこと、全部覚えてるの？」

残念そうに首を振る円。

円「ううん。でも、鈴のことだけは覚えとる！」

顔を見合わせる美咲と亮介。

大きな溜息をつく亮介。

人物表を指で辿り始める美咲。

美咲「でも……。もう源さんはいないわけで

しょ？　鈴さん、今の円を見ても源さんだ

ってわからないと思うよ」

亮介「お母さんのいう通りだ。今は円になっ

てるから、もう源さんじゃないんだろ？

それでも北九州に行くのか？」

円「うん！　行く！　鈴に会いたい！」

亮介「でも、鈴さんは円を知らないんだよ」

円「それでもいい——鈴に会いたい！」

美咲「鈴さんに会ってどうしたいの？」

円「『ごめん』と『ありがとう』を言いたい」

美咲「ごめん？　何を？」

円「鈴を一人ぼっちにしたけ、ごめんっちな

う——そして今までありがとうっちな言いた

い。鈴に……鈴に、会いたいよお」

円の瞳からこぼれ落ちる大粒の涙。

美咲「円……」

円をギュッと抱きしめる美咲。

円の頬に流れる涙を手で拭いながら、

美咲「円！　鈴さんに会いに行こう！」

亮介「おい!？」

円「ホント!!」

美咲「うん。だから今日はもう寝なさい。も

う遅いから」

円「うん！　ありがと、おかあ！」

笑顔で応える美咲。

呆れた顔で2人の様子を見つめる亮介。

### ○同・円の部屋（深夜）

幸せそうな円の寝顔。

### ○同・LDK（深夜）

テーブルに向かい合う美咲と亮介。

テーブルの真ん中には鈴の絵。

亮介「頭が痛くなってきた。ヤバいぞ、円」

美咲「だから言ったでしょ」

亮介「前世が30代の男って——」

美咲「——想像できない」

亮介「ああいうのは、何科に行けばいいんだ」

美咲「かかりつけの小児科の先生に相談して

みようと思うけど」

亮介「そうだな……」

美咲「でも、約束を果たしてからじゃないと」

亮介「約束？」

美咲「家族旅行よ」

呆れたように美咲を見る亮介。

亮介「円の話信じるのか？」

美咲「よくわからない。でも、円がそうした

いなら、向き合おうと思ってる」

亮介「向き合おうたって、円の空想なんだぞ！

どうやって向き合うんだ？」

美咲「気が済むまで鈴さんを探させてあげる

つもり。いないってわかったら、あの子、

現実を受け止めるかもしれないし」

亮介「空想の世界にピリオドを打つ為か？」

美咲「今の円に必要なことよ」

亮介「俺はやだな。気が乗らない。第一、いない人を探すなんて、円が可哀想だ」

美咲「円にしっかり現実を見せるの。あの子がこうなったのは、私達に責任があるのよ」

亮介「現実がわかったら、円は良くなるのか？」

ますますおかしくなるんじゃないか？」

美咲「わからない。でも、病院に行く前にやってみる価値はあるでしょ？」

亮介「——病院には行かせたくないな」

美咲「どうする？ 私は一人でも行くわよ」

亮介「……円が良くなるなら——」

鈴の絵を手に取り、考える様子の亮介。

亮介「——休暇とれるように調整してみるよ。

少し時間をくれ」

頷く美咲。

## ○線路を走る新幹線・全景

T「2週間後」

○走る新幹線・中

窓側から円、美咲、亮介が座る。

外の景色を見てはしゃぐ円。

亮介、不服そうに、

亮介「何で新幹線？ 何時間かかるんだよ」

美咲「円が飛行機は嫌だって」

円「飛行機、好かん！」

亮介「どうして？ 帰りは飛行機にしない

か？ 雲の上の景色キレイだぞ」

円「知つとうよ。何べんも見たことあるもん。

でも、天国に近いイヤだ！」

亮介「はあ……天国ねえ」

○北九州市黒崎地区・全景

JR黒崎駅を中心に、南側は商業地帯、

北側は工業地帯が広がる。

○コムシテイビル・外観

黒崎駅横に立つ複合施設。

入口に『八幡西区役所』の文字。

○同・八幡西区役所・市民課

窓口で職員に詰め寄る亮介。

亮介の後ろには美咲と円。

汗ビツシヨリで困り顔の職員。

職員「ですから、個人情報には教えられない規則になっております」

亮介「せめて20年前に鈴と源という夫婦がいたかどうかだけでも教えてくださいよ」

職員「いえ、ですから――」

亮介「そのパソコンでチョチョッと検索すればわかるでしょ？　お願いしますよ！」

職員に手を合わせて頼む亮介。  
2人のやりとりを見つめる円。

○同・外（夕）

出て来る亮介、円、美咲。

亮介「――ったく！　個人情報だ、個人情報だ  
って、役所は冷たいな！」

早歩きの亮介。

美咲「当たり前じゃない。あなたの方がおか

しいわよ。恥ずかしいと思ったらないわ！」

ますます早歩きになる亮介。

亮介に駆け寄る円。

円「おとう、ありがとう」

申しわけなさそうに亮介の顔を見る円。

亮介「いや、お父さんこそカリカリしてごめん。ホテルで作戦を考えような」

円「うん！」

亮介の手を掴み、ギュツと握る円。

その小さな手を見つめる亮介。

微笑み合う亮介と円。

2人の後姿を見つめる美咲。

悔しそうに唇を噛む。

### ○北九州の街・全景（夜）

宝石のように輝く工業地帯の夜景。

### ○シティホテル・全景（夜）

国道沿いに面した高層ホテル。

道路を隔てた反対側は繁華街。

○同・客室（夜）

広めのツインルーム。

スーツケースの荷物を整理する美咲。

ベッドで地図を広げる亮介。横には円。

仲良く寄り添って地図を見る2人を不  
服そうに見つめる美咲。

亮介「折尾駅のかしわうどんを食べてたって  
ことは、源さん達は折尾駅を利用する範囲  
に住んでいたってことだよな」

円「うん。折尾駅はハッキリ覚えとる」

亮介「ということは……この辺りまで視野に  
入れて探さないといけないけど——範囲が  
広いな。円、他に何か思い出さないか？」

円「他に？ えーとねー……」

円、目を瞑り記憶を懸命に辿る。

置時計の針が過ぎていく。

円に寄り添い見守る亮介。

2人を見つめる美咲の冷たい視線。

美咲、円の着替えを手に持ち、

美咲「円、お風呂に入るよ！」

集中する円。美咲の声には無反応。

苛立ちを隠せない美咲。

美咲「円！聞こえてる？」

円「——あ!!」

亮介「どうした？何か思い出したか？」

円「……酒屋——」

亮介「酒屋？」

円「酒屋で働きよった！」

亮介「鈴さんが？」

円「うん！酒屋のおばちゃんと鈴、すご

く仲良しだった」

亮介「酒屋の名前を憶えてるか？」

残念そうに頭を振る円。

亮介「そうか……でも、いい情報だよ。明日

は酒屋を回ってみよう！」

円「うん！」

亮介と鈴、笑顔でハイタッチ。

ますます機嫌の悪くなる美咲。

美咲「円、お風呂！」

円「おとうと入る！」

美咲「え？ お父さんは円の頭洗えないよ」

円「でも、おとうがいい！」

亮介「（嬉しそう）お父さんだって円の頭くらい洗えるぞ。よし、一緒に入るか？」

円「うん！」

○同・バスルーム・中（夜）

浴槽に浸かる亮介と円。

亮介「円、酒屋のことよく思い出したな」

円「うん、酒屋のおばちゃん、鈴をそうとう可愛がった。浴衣も縫ってくれた」

亮介「浴衣？」

円「うん。盆踊りの時にね……あ、源はね、盆踊りの歌がそうとう上手いんよ！」

亮介「盆踊りの歌？」

円「えつとねえ……月がく出た、出たく、月がく出たあ、あ、ヨイヨイ」

亮介「炭坑節？」

円「そう！ 鈴、この歌、大好きやったと」

○同・客室（夜）

円が歌う炭坑節が浴室から聞こえる。  
亮介の手拍子も加わり、楽しげに合唱。  
2人の歌声に唇を噛みしめる美咲。  
亮介がベッドに脱ぎ捨てた服を思いつきり壁に投げつける美咲。

○夜空（深夜）

○シテイホテル・客室（深夜）

ベッドで寝息をたてる円。  
添い寝をし、円の髪を撫でる美咲。  
スマホで検索しながら、地図に印をつけていく亮介。

美咲「随分、熱心ね」

亮介「あー、先に寝てていいぞ。俺は酒屋の位置を調べて寝るから」

美咲「円の話、信じてなかったんじゃないの？」

亮介「ん？」

美咲「何だか凄く楽しそうだから」

亮介「……今日、円が手を繋いできたんだ。  
あの時さ、ちよっと泣きそうになったよ。  
円、俺を頼ってんだよな」

美咲「今まで散々放ったらかしてきたくせに」  
亮介「でも今は、君の望みどおり、円と向き  
合ってたんだよ。何か悪いか？」

美咲、ムツとした表情。

美咲「いいえ。どうぞ頑張ってください！」  
勢いよく掛け布団を被る美咲。

### ○道（朝）

地図を片手に歩く亮介、円、美咲。  
三人とも帽子を被り、首にはタオル。  
円の手には酒屋のリスト。  
意欲的に歩く亮介と円。  
その後ろを不機嫌そうに歩く美咲。

### ○酒屋・外観

中から出て来る亮介、円、美咲。  
リストの店舗名に×印をつける円。

○道

炎天下で陽炎が立ち上る道路。

汗を拭きながら歩く亮介、円、美咲。

暑さで真っ赤な顔の円。

○別の酒屋・外観

中から出て来る亮介、円、美咲。

酒屋のリスト表は×印だらけ。

汗びっしょりで苦しそうな円。

亮介「円、大丈夫か？」

円「うん！　大丈夫！」

○公園

割れんばかりの蟬の大合唱。

蛇口から直接頭に水をかぶる亮介。

洗ったタオルを絞る美咲。

木陰のベンチに座る円。顔面蒼白。

美咲「暑い……一旦、ホテルに帰らない？」

亮介「そうだな。あとは日が落ちてからにす

るか？　なあ……まど!!」

ぐったりとして意識がない円。

美咲・亮介「円！」

○シテイホテル・客室（夜）

氷枕を敷き、ベッドでぐっすり眠る円。

円の額に手を当て、熱を見る美咲。

心配そうに円を見つめる亮介。

美咲「熱、下がったみたい」

亮介「良かった。注射が効いたんだな」

美咲「あと少し遅かったらと思うと、ゾツとするわ」

亮介「円、一言も弱音を吐かないから」

円の寝顔を見つめる亮介。

美咲「ねえ、ちよつといい？」

亮介を促し、窓際のカフェテーブルに移動する美咲。

美咲「明日、東京に戻りましょう」

亮介「明日？」

美咲「ええ」

亮介「待てよ。俺の休暇はまだ2日あるぞ」

美咲「じゃあ、あなただけ残れば？ 私は円と帰るわ。円の身体が心配なもの」

亮介「一晩寝たら回復するだろうって医者と言ってたじゃないか」

美咲「回復したって、あんな暑い所探し回ってたら、また倒れるでしょ？」

亮介「対策を考えればいいさ。タクシーをチャーターしてもいいし」

美咲「無理できないわ。円はまだ7歳よ！ あなたは知らないでしょうけど、昔からの子、身体は強くないの」

亮介「何だよ。君が言いだしたんだろ？ 円に現実を教えたいって！」

美咲「確かにあの時はそう言ったけど、今は円の身体が一番でしょ！」

亮介「は、それだけじゃないだろ？ 君は俺と円が仲良くするのが気に食わないんだ」

美咲の顔色が変わる。

美咲「何よ！ あなたこそ円に気に入られようと必死じゃない！ 鈴さんなんていな

いって思ってるくせに！」

亮介「今、そんな話してねえだろ！」

美咲「だって気味が悪いもの」

亮介「何だと！」

円の声「喧嘩せんで！」

声の方に振り返る美咲と亮介。

起き上る円。

美咲「円！」

亮介「もう大丈夫か？」

ベッドから下り、2人の前に立つ円。

円「何で？ 何で、いつも喧嘩ばかりするん？

せつかく一緒におれるのに、何でおとうと

おかあは、仲良く出来んの？」

美咲・亮介「……」

円「一緒におりたくても、おれん人だって、

いっぱいおる！ 天国にはそんな人達がい

っぱいおった！」

美咲「円……」

円「おとうもおかあも、好かん!!」

勢いよく部屋を飛び出す円。

○ホテルの前の歩道（夜）

ホテルから走って出て来る円。

後を追う美咲と亮介。

山瀬「円——、おい、止まれ！」

美咲「待ちなさい！ 円！」

振り返らず走る円。

点滅する信号の横断歩道を渡る円。

赤に変る信号。

美咲「あ！」

横断歩道に飛び出そうとする美咲を襲

う激しい車のクラクション。

反射的に美咲の肩を掴む亮介。

山瀬「危ない！」

美咲「離して！ 円が……円——！！」

走り去る円を大声で呼ぶ美咲。

繁華街に消えていく円の後姿。

○繁華街（夜）

左右に別れ、円を探す美咲と亮介。

人混みの中、円の名を叫び続ける美咲。

○公園（夜）

繁華街を抜けた所にある小さな公園。

ブランコに座る円。

溢れる涙を腕で拭く円。

円、泣きながら空を見上げる。

美しく輝く星空。

○繁華街（夜）

合流する美咲と亮介。

亮介「（息を切らし）どうだった？」

首を横に振る美咲。憔悴しきった表情。

美咲「円にもしものことがあったら……」

スマホで地図を確認する亮介。

亮介「駅の近くに交番がある」

美咲「行きましょう！」

走り出そうとする美咲。

その時、公園の矢印看板に気づく。

美咲「近くに公園があるみたい」

亮介「そこにいるかも」

顔を見合わせ、走り出す美咲と亮介。

○公園・中（夜）

ブランコに座り、瞑想する円。

意識を集中させる。

ザワザワと公園の木々が揺れ出す。

男（源）の声「もつと深く、もつと深く」

円、手を組み一心に意識を集中させる。

男（源）の声「もつと深く……もう少しだ」

次第に周囲の音が消え、無音の世界へ。

突然、円の目の前が白く光る。

目を開け、光の方を見上げる円。

夜空に映し出される映像。

『ふくだ酒店』の大きな日除け暖簾。

店前にジョウロで水を撒く女性の姿。

女性はエプロン姿の鈴。

通り過ぎる猫に話しかけながら、少女

のように笑う鈴。

円「鈴！」

勢いよくブランコから立ち上がる円。

その瞬間、夜空に消えていく鈴の笑顔。

夜空を見上げたまま涙を流す円。

遠くから円を呼ぶ声。

振り向く円。

そこには美咲と亮介の姿。

美咲「円！」

円に駆け寄る美咲と亮介。

美咲、円を力いっぱい抱きしめる。

美咲「ごめんね……ごめんね、円」

安堵してへたり込む亮介。

### ○シテイホテル・客室（夜、深夜）

部屋には美咲、円、亮介。

スマホで検索する亮介。

亮介「ふくだ酒店——おつ、ある！」

美咲「ホント!? 本当にあるの!?!」

亮介「ああ……リストから漏れてたみたいだ」

美咲「まさか……」

考え深げに円を見る美咲と亮介。

荷物からスケッチブックとクレヨン

を取り出し、絵を描く準備を始める円。

と、突然、頭を押さえ顔を顰める。

美咲「円、頭が痛いのか？」

円「頭の中で音がする。ゴォーっちいう音」

亮介「また熱がぶり返すんじゃないか？ も

う寝た方がいい」

美咲「そうね。酒屋さんはわかったんだし、

今日はゆっくり休もう。ねえ」

円「ううん。この音、前から時々聞こえると。

円、絵を描く！ 鈴にあげたいけ」

美咲「また熱が出るよ。明日の朝に描いても

いいんじゃない？」

円「ううん、今、描かんと忘れるけ！」

亮介「忘れる？」

円「頭で音がするたんびに、少しづつ鈴のこ

と忘れていきよると。忘れたら描けんや

ろ？ 絵、描きよったら忘れんけ」

クレヨンを持つ円。

美咲「円……」

× × ×

時計の針は夜中の1時を回っている。

ベッドで寝息をたてる円。

サイドテーブルには円の描いた絵。  
源が鈴に向日葵をプレゼントする絵。  
その絵を眺める美咲と亮介。

美咲「円の話、本当かもしれない」

亮介「ああ。信じられないけど、そういう世界が本当にあるのかもな」

美咲「……円、鈴さんを忘れない為に、絵を描き続けてたのね」

亮介「必死に前世の記憶と戦ってたんだな」

美咲「友達と遊ばないんじゃないかって、遊びたくても遊べなかったのよ」

亮介「記憶が消える恐怖と戦ってたんだ」

美咲「——まだ7歳なのに……可哀想に」

亮介「ああ」

絵を手取る美咲。

力のこもった目で絵を見つめる。

美咲「……私、決めた！」

亮介「え？」

美咲「絶対に鈴さんを見つける！ 円を必ず鈴さんに会わせるわ！」

○青空（朝）

雲一つない青空。

○ふくだ酒店・外観（朝）

古民家で落ち着いた店造り。

店先に店名入りの大きな日除け暖簾。

酒店の看板を見上げる円、美咲、亮介。

亮介「円、ここで間違いないか？」

懐かしそうに店を見上げる円。

円「うん！ 変わつとらん！」

美咲「まだ開いてないみたいね。どうする？」

亮介「どこかで時間を潰すか……」

店の中を覗く円。

円「あ、人がおる！」

美咲と亮介も店の中を覗く。

白髪頭の初老の女性の姿が見える。

円「あれ？ あのおばあさん？ あ、やっぱ、

福田のおばちゃんだ！」

店の中に向って手を振る円。

円に気づく福田綾子（70）。

ガラス戸の鍵を開け、顔を出す綾子。

綾子「お客さん？」

亮介「あ、すみません。まだ開店時間じゃないですよ？」

綾子「構わんですよ。どうぞ、どうぞ」

### ○同・店内（朝）

歴史を感じさせる店内。

綾子に名刺を渡す亮介。

その横に立つ美咲と円。

不思議そうに名刺を見る綾子。

綾子「山瀬……さん？」

亮介「はい。東京から来ました」

綾子「東京から？」

亮介「実は私達、鈴さんという女性を探して  
おりました」

怪訝そうに亮介を見つめる綾子。

綾子「鈴さん？」

亮介「はい。ご存じないですか？ 以前、この  
お店で働かれていたと思うんですが」

息をこらし、綾子を見つめる美咲と円。

綾子「知らんねえ。何かの間違いでしょ」

美咲「20年程前なんですが——」

綾子「20年も前のことなんて覚えとりませんよ！」

円、驚きの表情。

綾子「でも、わざわざ東京から来て、何でその人を探しとるんです？」

亮介「以前、鈴さんの亡くなられたご主人に大変お世話になりました」

綾子「ご主人に？」

亮介「はい。お参りさせて頂きたいんです」

綾子「そう……それはご苦労様です。でも、うちじゃないですよ。勘違いです」

円「嘘！」

ビクツとする綾子。

綾子に駆け寄る円。

円「知つとるやろ？ おばちゃん、鈴を可愛がったやん！」

綾子のエプロンを掴み、揺らす円。

綾子「なんね、この子！」

慌てて綾子から円を引き離す美咲。

美咲「円、やめなさい」

円「だって——知らんわけないもん！ あ、

ほら、キンピラ、作ってくれたやろ？」

「キンピラ」という言葉に一瞬、顔色  
の変わる綾子。

その綾子の表情を見逃さない美咲。

綾子「いったい、あんた達、子供に何を吹き  
込んだん？ 鈴さんなんて人、本当に知ら  
んのよ！ 帰ってちょうだい！」

再び、綾子に駆け寄る円。

円「嘘やん！ なんで嘘つくん！」

亮介「円！」

叫ぶ円を抱きかかえる亮介。

亮介「美咲、これ以上はご迷惑だ。帰ろう」

美咲「亮さん、ごめん。ちよつと先に円と外  
で待っててくれる？」

亮介「え？」

亮介に視線で合図を送る美咲。

亮介「わかった。外で待ってるよ」

暴れる円を抱え、外に出る亮介。

美咲を睨む綾子。

綾子「あんたも帰ってくれんね。店を開ける

準備があるけん」

美咲「帰ります。でも、少しだけ話を聞いて

もらえますか」

綾子「(苛立ち)なんね」

美咲「娘の円のことです」

店の外に目をやる美咲。

泣いている円の足もとに子猫が近づく。

子猫を抱き上げ、円に抱かせる亮介。

ベソをかいていた円が笑顔になる。

美咲「信じ難い話なので驚かないでください」

綾子「だけ、なんね！ 早く言わんね」

美咲「円は、鈴さんのご主人の生まれ変わり

らしいんです」

目を丸くする綾子。

綾子「はあ！ あんた、何言つとるん？」

美咲「すみません。でも、本人がそう言うん

です。その想いが強くて——」

○同・店の外

猫を抱き抱える円に寄り添う亮介。

円「かわいい」

亮介「首輪してるから飼いだな」

円「おうちがあるん？」

亮介「たぶん」

円「鈴、野良猫にいつつも餌やって、福田の

おばちゃんに怒られよったんよ」

亮介「鈴さん、猫が好きなんだ」

円「猫だけやない。生き物全部好きやった」

亮介「そうか。優しい人だな」

円「うん。でも、福田のおばちゃんも優しい

んよ。鈴が拾った猫、店で飼ってくれた」

亮介「へえ」

円「……おばちゃん、何で鈴のこと覚えてな

いとか言うんやか？ あんなに仲良しや

ったのに。本当に忘れたんやか」

悲しそうに目を伏せる円。

円の髪を優しく撫でる亮介。

○同・店内

綾子に話を続ける美咲。

美咲「娘は鈴さんに会いたがっています。私達も会わせてあげたいと思っています」

綾子「あんた達、正気なん？」

美咲「信じてもらえなくて当然です。私もここに来るまでは信じていませんでした」

綾子「え？」

美咲「この酒屋で鈴さんが働いていたことを言いだしたのは円なんです」

綾子「——やけ、違うっちゃ！」

美咲「わかりました。話を聞いていただいて、ありがとうございます。私達は明日の12時

27分発の新幹線で東京に戻ります」

綾子「……」

美咲「もし、何か思い出されたら、名刺の携帯に電話をください。お願いします」

綾子「思い出すもなんも、私は知らんから」

美咲「私、またここに来ます」

綾子「は？」

美咲「鈴さんが見つかるまで、何度でも北九州に来るつもりです」

真剣な眼差しを綾子に向ける美咲。

その迫力に言葉の出ない綾子。

### ○同・店の外

路地に戻っていく猫を見送る円と亮介。

店から美咲が出て来る。

美咲に駆け寄る円。

円「おかあ！」

円に優しい笑みを浮かべる美咲。

亮介「どうだった？」

首を振る美咲。

円「おばちゃん、鈴のこと忘れたっち？」

円の視線に合わせてしゃがむ美咲。

美咲「思いましたら電話をくれるって。だから、今日はこの辺を探してみようか」

円「うん！ 探す！」

亮介「よし！ 行こう」

手を繋ぎ、歩き出す亮介と円。

歩き始めようとして、ふと、店の中に視線を移す美咲。

円の後姿を見つめる綾子と目が合う。

綾子に向い、深々と頭を下げる美咲。

#### ○ふくだ酒店・店内

小さくなる三人の後姿を見つめる綾子。

綾子「……」

#### ○シテイホテル・外観（夜）

#### ○同・客室（夜）

ベッドで寝息をたてる円。

円の寝顔を覗き込む美咲と亮介。

美咲「よく寝てる」

亮介「今日も一日歩き回ったからな」

美咲「結局、鈴さん見つからなかった。円、

可哀想に、落ち込んだじゃって……」

亮介「仕方ないさ。やれるだけのことは全部やっただから」

美咲「福田さんも電話くれなかったし」

サイドテーブルの亮介のスマホを恨めしそうに見る美咲。

亮介「ああ」

美咲「福田さん、鈴さんのことを本当に知らないと思う？」

亮介「さあな。忘れてるのかもしれないし。どっちにしても、今の鈴さんの居場所は知らないんじゃないのか？」

突然、亮介のスマホの着信音。

美咲「!!」

慌ててスマホを手取る亮介。

亮介「もしもし……は？ あ、常務!？」

美咲に振り返り、首を振る亮介。

肩を落とす美咲。

亮介「はい。ええ、今、北九州です。明日？夜ですか？ その時間でしたら東京に戻っています……はい。わかりました」

スマホを置く亮介。

美咲「常務さんから？」

亮介「ああ、明日の夜、接待に同席しろって」  
美咲「ずいぶん急ね」

亮介「先方が今、日本に来てるらしい。中国の最大手だから、会社も必死なんだ」

美咲「みたいね。常務さんが直々にあなたに電話だなんて」

亮介「ああ——俺が一番やりたかった仕事だ」  
夜景を見てニヤリとする亮介。

その様子を見つめる美咲の冷えた視線。

### ○折尾駅・全景

全面改装工事中の折尾駅。  
駅近くにうどん店が見える。

### ○うどん店・外観

かしわめし、かしわうどんののぼり旗。

### ○同・店内

券売機があるカウンターのみの店。  
カウンターに座る美咲、円、亮介。

元気のない円。

3人の前にうどんが置かれる。

店員「お待たせしました。熱いですけん、お嬢ちゃんにはこれでとり分けてあげて」

店員が子供用の器を円の前に置く。

店員に頭を下げる美咲。

美咲「あの……このうどん屋さんって折尾駅の構内にあつたんですか？」

店員「ええ。前は3番ホームに。今は駅が工事しとりますけ、ここで営業しとります」

美咲「3番ホーム……」

○（フラッシュユ）

円の声「3番ホームにあるんだよ！」

○元のうどん店・店内

うどんをとり分けながら、感慨深げに

円を見つめる美咲。

美咲「はい、円」

麵を取り分けた器を円の前に置く美咲。

俯いたまま、うどんに手をつけない円。

亮介「食べないのか？ 旨いぞ」

美咲「かしわうどん、ずっと食べたかったん

でしょ？ 伸びちゃうよ」

亮介「食べないなら、お父さんがもらうぞ」

円のうどんに手を伸ばす亮介。

円「ダメー！ 円の！」

うどんをひと口、口に入れる円。

円「——おんなじ味」

美味しそうにうどんを啜り始める円。

その様子を切なげに見守る美咲。

### ○小倉駅・新幹線ホーム

ホームの喧騒。

新幹線到着を告げる案内が流れる。

到着を待つ乗客の列に、スーツケース

を引く亮介、美咲、円の姿。

元気のない円の手を強く握る美咲。

到着音と共にホームに入る新幹線。

○停車中の新幹線の中

切符を手に席を探す亮介。

その後ろに続く美咲と円。

窓の外の何かに気づく円。

突然、美咲の手を振りほどき新幹線か

ら飛び出して行く円。

美咲「ちよつと！ 円！」

○小倉駅・新幹線ホーム

発車のベルが鳴り響く。

間一髪、扉が閉まる前に美咲と亮介も

ホームに降りる。胸を撫で下ろす2人。

その直後、出発する新幹線。

円を探す美咲の視野に綾子の姿が映る。

美咲「えっ？」

美咲達に向い、深く頭を下げる綾子。

綾子の横には満面の笑みの円。

○同・コーヒーショップ

四人掛けのテーブルに綾子と対座する

美咲と亮介。綾子の隣には円。

亮介「よく来てくださいました」

美咲「鈴さんのこと、思い出されたんですね？」

綾子「……何から話せばいいのか」

亮介「何でもかまいません。福田さんの覚えていらっしやること何でも教えてください」

綾子を見つめる美咲達。

重い口を開く綾子。

綾子「——2人とも本当にええ子でした」

亮介「2人？ 源さんもご存じなんですか？」

綾子「ええ。源ちゃんは建築現場で働いたり  
しましたが、休みの日はうちの店をよう手  
伝ってくれて」

美咲「そうなんですネ」

綾子「本当によろしく働いてくれて。でも、あの子、アルバイト代は受けとらんです。おばちゃんのキンピラでいいって」

美咲「キンピラ？ そう言えば、円が——」

綾子「あん時は驚きました」

円「だって、おばちゃんのキンピラ、凄いいお

いしかったもん」

美咲「円、覚えてたの？」

円「うん！」

綾子「源ちゃんの大好物やったです」

亮介「源さんは事故死されたんですよね？」

綾子「はい。ビルの解体现場で……落ちてきた鉄骨の下敷きになって——」

綾子の話を真剣に聞く美咲と亮介。

神妙な顔の円。

綾子「酷い怪我で……即死でした」

美咲「お気の毒に」

綾子「正義感が強うて優しゆうて。あんなに

いい子が……神様は残酷です」

美咲「鈴さん、さぞ、お辛かったでしょうね」

綾子「それはもう……」

### ○（回想）ビル解体工事現場・外観

空を見上げ、涙する鈴。

綾子の声「ごはんも食べんで、一日中、空を見て泣いとりました」

○元の小倉駅・コーヒーショップ

綾子の話を聞く美咲、亮介、円。

綾子「鈴ちゃんのことを心配で……うちで一緒に暮らすように呼んだんです」

亮介「福田さんの家で!?!」

美咲「鈴さん、親御さんは?」

円「おらんもん!」

驚いて円を見る綾子。

綾子「お嬢ちゃん、よう知つとるね。本当に

源ちゃんの生まれ変わりかもしれん」

美咲「鈴さんに身寄りはなかったんですか?」

綾子「2人とも養護施設で育つとんです」

美咲・亮介「!」

綾子「いつか自分達の家を建てて、身よりのない子を受け入れたいっち……それが源ちゃんの夢やったです」

美咲「家?」

綾子「その子達の親になって、普通の家庭をつくるんだっち、いつも言いよったです」

亮介「——普通の家庭」

綾子「鈴ちゃん、その夢を叶える為に、源ちゃん  
の保険金で家を建ててるっちなんでして」

○（回想）ふくだ酒店・茶の間

店から続く和室。

卓袱台に座る鈴と綾子（50）。

家の設計図を広げ、綾子に見せる鈴。

指さしながら笑顔で説明をする鈴。

綾子の声「私とその夢を壊してしまった」

○元の小倉駅・コーヒーショップ

綾子の話を聞く美咲、円、亮介。

亮介「どういうことですか？」

一呼吸置く綾子。

綾子「工務店に保険金を持ち逃げされて」

美咲「え!？」

円「持ち逃げっちなあんな？」

亮介「それは……」

円「ねえ、なあん？　ねえ！」

美咲「……鈴さん、お金を取られたんだって」

円「鈴のお金？　なんで？　なんで！」

目に溜まる涙をハンカチで拭く綾子。

綾子「私のせいです」

亮介「どういふことですか？」

綾子「持ち逃げした工務店を鈴ちゃんに紹介したの、私やけん」

流れる涙をハンカチで拭く綾子。

綾子「幼馴染がしよる店やっただんです。資金繰りが苦しいけ、助けてくれっちな言われて。つい、鈴ちゃんを紹介してしもて」

### ○（回想）岩永工務店・外観

店前に沢山の債権者が集まっている。

血相を変え、走ってくる鈴と綾子。

債権者を掻き分け、店の前に立つ鈴。  
激しく扉を叩く鈴。

鈴「（叫ぶ）岩永さん！　岩永さん！」

債権者の男「無駄たい。もうおらんぞ」

鈴「そんな……どうして……」

債権者の男「ギャンブルでエライ借金つくっ

て、ヤバいところから借りまくったらしい。あんた、いくら貸しとった？」

鈴「私は——」

鈴の両手の握り拳がワナワナと震える。

天を見上げ、悔しそうに大声で叫ぶ鈴。

鈴「ああああああああああ——」

ヘナヘナとその場に座り込む綾子。

### ○元の小倉駅・コーヒーショップ

綾子の話を聞く、亮介、美咲、円。

美咲「酷い……」

円「鈴、悪い人に騙されたん？」

綾子「……」

円「ねえ、騙されたん！」

綾子「うちが間違っと思った……あん時は両方を助けたくて——」

亮介「犯人は見つからなかったんですか？」

顔をしかめ、首を振る綾子。

円「……鈴、可哀そう」

円の瞳に溢れる涙。

綾子「——本当に悔しか」

美咲「福田さんが鈴さんのことを隠したのは

——触れられたくなかったからですね」

綾子「関わるまいと思いました。でも……源

ちゃんの生まれ変わりの話を聞いて」

亮介「信じてくれたんですか？」

綾子「そんなことあるわけないっち、今でも

思うとります。でも……」

円の頬の涙を指で拭う綾子。

綾子「もし、それが本当なら、2人を会わせ

てやらんといかん。それに、あなたの——」

美咲を見つめる綾子。

綾子「子を想う強い気持ちに負けました」

美咲「ありがとうございます」

涙を浮かべ頭を下げる美咲。

円「おばちゃん、ありがとう」

目にいっぱい涙を溜め、綾子を見る円。

円に微笑む綾子。

亮介「で、今、鈴さんは？」

綾子の顔が曇る。

○走るタクシーの中

後の席に円、美咲、亮介。

哀しげな顔で窓の外を見つめる円。

円を気遣うような美咲と亮介の視線。

何気に腕時計を見てハツとする美咲。

美咲「あ、常務さんとの約束は？」

亮介「いいんだ」

美咲「いい？」

亮介「後で断りの電話をしとくよ」

美咲「そんな…飛行機を使えば、まだ間に

合うんじゃない？」

亮介「いや…いい」

美咲「大きな仕事なんでしょ？ プロジェク

トから外されたらどうするの？」

亮介「いいんだ」

美咲「でも…」

亮介「家族の方が大事だろ」

美咲「亮さん…」

照れ隠しに窓の外に目をやる亮介。

亮介を見つめる美咲の口元が緩む。

○介護施設『キートス』・全景

青空の下に広がる海。

海を一望する、北欧風の煉瓦造りの建物。

施設前に停まる一台のタクシー。

○同・玄関・前

タクシーから降りる亮介、美咲、円。

リボンで丸めた画用紙をしっかりと手に握る円。

○同・ロビー

木の風合いを生かしたインテリア。

窓から柔らかな光が差し込む館内。

ロビーに入ってくる亮介、美咲、円。

その美しさに感嘆の声をあげる3人。

美咲達に笑顔で近づく梶原梓（58）。

梓「こんにちは。山瀬さんですね？」

亮介「あ、はい」

梓「福田さんからお電話をいただいています。

施設長の梶原です」

亮介「山瀬です。よろしくお願ひします」  
梓「ご案内します。さあ、どうぞ」

○同・廊下

梓の案内で廊下を歩く亮介、美咲、円。

美咲「明るいですね」

梓「日光浴できそうですよ（笑）」

施設の中を見ながら歩く美咲達。

笑顔の入所者達とすれ違う。

美咲「皆さん、にこやかですね」

梓「ええ、それがうちの自慢です」

円「鈴も？　鈴も笑つとる？」

梓「え？　ええ、もちろんよ」

円「ホント？」

円を見て微笑む梓。

梓「山瀬さん、ありがとうございます」

亮介「は？」

梓「お嬢さんに鈴さんの話をたくさんしてくださって」

顔を見合わせ、苦笑いの亮介と美咲。

梓「鈴さんの病状はお聞きでしょうか？」

亮介「はい。若年性の認知症だと聞きました。

何が原因なんでしょうか？」

梓「それはわかりません。ただ、心労が重なって、体調を崩されたあたりからだ」と

美咲「あの……鈴さん、ご主人のことは」

梓「残念ですが、進行が早くて」

美咲「——そうですか」

ふと、頭を押さえ、顔をしかめる円。

誰も円の異変には気付かない。

梓「山瀬さんは鈴さんのご主人の源さんのお

知り合いなんですよね？」

亮介「源さんのことをご存じなんですか？」

梓「皆さんから沢山話を聞いておりますので」

美咲「皆さん？」

梓「今でも時々、源さんのお友達が鈴さんに

会いに見えるんですよ」

美咲「え？ 20年も経っているのに？」

梓「ええ。源さんは、今でも皆さんから慕われています……凄いです」

○同・食堂くテラス

梓に案内され、美咲達が入ってくる。  
ガラス張りの窓から見える美しい海。  
外には手入れされたテラスが続く。  
その美しさに息を呑む美咲達。  
窓を開け、テラスにおりる梓。  
美咲達もそれに続く。

梓「どうぞ、鈴さんはあちらです」

中庭の花壇を手で示す梓。  
花壇いっぱいに咲き誇る向日葵の花々。  
木陰のベンチに座る女性の姿。  
麦わら帽子を被った鈴(55)が、スタッ  
フに見守られ、向日葵を見つめている。

円「鈴……？」

美咲「あの人が……」

鈴を見つめ立ち尽くす美咲達。

梓「あの花壇も、お友達の手作りなんです。

夏は鈴さんのお気に入り場所です」

感慨深げに向日葵を見る美咲と亮介。

梓「今でも源さんは、色んな形で鈴さんを守

っっておられるんです」

見守りのスタッフを呼びよせる梓。

梓「では、どうぞごゆっくり」

### ○同・中庭

鈴の元に駆け出す円。

少し離れた場所から見守る美咲と亮介。

無邪気な笑顔で鈴に近づく円。

円を見つめる無表情の鈴。

円「鈴！」

画用紙のリボンをほどき、鈴に手渡そ

うとする円。

その瞬間、円の顔が歪む。

突然、頭を押え、画用紙を放り出す円。

地面に落ちて広がる画用紙。

頭を押さえ、地べたに座り込む円。

美咲「円？」

亮介「どうした？」

円の元に駆け寄る美咲と亮介。

円の額は汗でビッシヨリ。

美咲「大丈夫？ 頭痛いの？」

円「……だい……じょうぶ」

頭を振り、立ち上る円。

美咲「病院行こうか？」

円「ううん……もうよくなった」

ホッとする美咲と亮介。

美咲「円、ほら、前を見て」

美咲、円の背を優しく促す。

目の前には無表情の鈴。

美咲「鈴さんだよ」

首を捻る円。

不思議そうに鈴を見つめる。

円「……誰？」

顔を見合わせる美咲と亮介。

亮介「鈴さんだよ。源さんの奥さんの」

円「げんさん？」

亮介「覚えてないのか？」

コクンと頷く円。

美咲「……あ、そうだこれ！」

落ちている画用紙を円に渡す美咲。

美咲 「これは覚えてるでしょ？」

円 「なんの絵？」

顔を見合す美咲と亮介。

亮介 「円、記憶の限界が来たんだ」

美咲 「そんな…：一番、大事な時に…：」

ぼんやりと円を見つめる鈴。

鈴の視線にしゃがむ美咲。

美咲 「鈴さん、初めまして。これ——」

鈴の膝の上に画用紙を置く美咲。

無反応で絵を見つめる鈴。

美咲 「鈴さん、源さんを覚えてる？」

能面のような表情の鈴。

美咲 「鈴さんの旦那さんの源さんよ」

不思議そうに美咲を見つめる鈴。

固唾を呑んで見守る円と亮介。

美咲 「（焦る）お願い！ 思い出して！」

鈴の両肩を掴む美咲。

美咲 「あなたの旦那さんの源さんよ！」

鈴の表情が陰しくなる。

美咲と鈴を交互に見て、心配そうな円。

亮介 「美咲、焦るな。鈴さんが困ってる」

美咲 「だって……」

亮介 「鈴さんは認知症なんだ。何か記憶を引き出すような話をしないと」

美咲 「そんなこと言っても——」

亮介 「あ！」

何か閃いたような亮介の顔。

突然、手拍子を始め、歌いだす亮介。

亮介 「月がく出た、出た、月がく出たあ」

美咲 「亮さん!？」

かまわず、大きな声で歌う亮介。

円も見よう見まねで手拍子に加わる。

亮介の歌にジッと耳を傾ける鈴。

汗びっしりよりで歌い続ける亮介。

段々、鈴の表情がしつかりしてくる。

鈴の口元がゆっくりと動き出す。

美咲 「あ……」

手で亮介が歌うのを制す美咲。

歌うのを止める亮介。

鈴、蚊のなくような声で、

鈴「……さあぞや……おつきさん、けえむた

あかろ……さのよいよい」

顔を見合わし、頷く美咲と亮介。

美咲「鈴さん、源さんを思いだしたの？」

鈴「……げん……ちゃん？」

美咲「そう！ 鈴さんの旦那さんの源さん」

どんどんしつかりしてくる鈴の顔つき。

鈴「——どこ？」

美咲「え？」

鈴「げんちゃん……どこ？」

美咲「あ……源さんは天国に行ったの」

鈴「てん……ごく？」

円の背を押し、鈴の前に立たせる美咲。

美咲「そう……それで、この子、円っていう

んだけど——この子が天国の源さんから、

鈴さんへ、この絵を預かってきたの」

円「え!？」

驚いて美咲の顔を見る円。

美咲、涙を堪え、鈴に語り続ける。

美咲の顔をジッと見る鈴。

美咲「あのね、源さんから鈴さんに伝言があるの……何も言わずに天国に行っちゃって『ごめん』って……そして、今まで『ありがとう』って」

美咲の顔を見つめる鈴。

鈴「……なんも」

首を横に振り、一生懸命口を動かす鈴。

鈴「げんちゃん……なんもわるくない」

視線を画用紙に落す鈴。

絵を愛おしそうに見つめ、画用紙に描かれた源を優しく撫でる。

鈴「……げん……ちゃん」

と、突然顔を上げる鈴。

鈴「……けが……は？」

美咲「怪我？ あ、源さんの？」

心配そうに美咲を見つめる鈴。

美咲「大丈夫。源さんの怪我はもう治ったわ」

鈴「ホント？」

美咲「本当よ」

鈴「いたくない？」

美咲「ええ。もう痛くないわ」

安堵の表情で、涙を浮かべる鈴。

鈴「……よかつ……た」

感動で唇が震える美咲。

鈴の瞳に涙が溢れ、絵の上に落ちる。

心配そうに鈴に近寄る円。

円「おばちゃん、大丈夫？」

くりくりした目で鈴を覗き込む円。

菩薩のように円に微笑む鈴。

鈴「絵……ありがとう。げんちゃんに伝えて」

優しく円を抱きしめる鈴。

ふいに円の瞳に溢れる涙。

円「え？」

自分の涙に驚く円。

その瞬間、円の顔がゆっくり歪む。

鈴に抱かれたまま声を上げ泣き出す円。

心に溜まっていた想いを浄化させる

ように大声で泣く。

その様子に泣き崩れる美咲と亮介。

風に揺れる向日葵。

○海辺(夕)

キラキラ光る海。

鈴の手をひき、ゆっくりと散歩する円。

少し離れた場所から、その様子を見守る美咲と亮介。

美咲 「記憶が消えても、2人は仲がいいね」

亮介 「心で結びついてるんだ」

美咲 「そうだね」

亮介 「……本当だったな」

美咲 「うん……嘘じゃなかった」

亮介 「ああ」

泣きそうになる美咲。

美咲 「——私、今ならわかる」

亮介 「ん？」

美咲 「鈴さんに会って謝りたいって言った

円の気持が」

亮介 「え？」

美咲 「(涙声)私も謝りたい」

美咲を見る亮介。

美咲 「私、あの子を怒ってばかりいた」

亮介「君は良くやってたよ」

首を横に振る美咲。

美咲「あの時の円にはもう会えないんだよね」

美咲の頬を涙が伝う。

美咲を優しく見つめる亮介。

亮介「あの時も今も、円は円だよ」

美咲「……」

亮介「俺達の円だよ」

美咲「……うん」

遠くで円のはしゃぐ声が聞こえる。

亮介「見てみる。円の楽しそうな顔」

鈴と楽しそうに笑いあう円。

美咲「ホント。いい笑顔——」

海の向こうに広がる美しい夕焼け空。

4人の姿を赤く照らす。

## ○東京の街・全景

よく晴れた青空。

スカイツリーの周辺に広がる街。

## ○歩道

スーツケースを引く亮介と美咲。

スキップしながらその前に行く円。

美咲達の住むマンションが見えてくる。

円「あ、おうち！」

駆け出す円。

美咲「円、転ぶよ！」

一気にマンション前まで走る円。

振り返り、美咲と亮介に両手を振る円。

美咲「元気だなあ」

手を振り返す美咲。

2人の様子を見つめる亮介の表情が、  
フツと真剣な顔つきに変わる。

亮介「美咲」

美咲「（振り返り）ん？」

亮介「家に着く前に……ちよつと」

美咲「何？」

咳払いをする亮介。

美咲「どうしたの？」

亮介「今まで……悪かった」

頭を下げる亮介。

亮介「俺、自分のことばっかで——」

首を横に振る美咲。

美咲「謝るのは私の方……ごめんなさい」

亮介「え……」

美咲「私、よその家と比べてばかりいたの。

うちだけ幸せじゃないって思ってた」

亮介「……美咲」

美咲「でも、間違ってた」

亮介を見つめる美咲。

美咲「亮さんが頑張ってくれてるから、私達、

家族でいられるの。家族で暮せることが、

どれだけ幸せなことか——」

心配そうに美咲達を見ている円。

美咲「円が教えてくれた」

涙を浮かべ、円を見つめ返す美咲。

美咲「——私達、いつか、鈴さんと源さんの

ような夫婦になれるかな？」

亮介「——なれるよ。いや、なろう！」

涙を拭い、右手を差し出す美咲。

美咲「よろしくお願いします！」

照れながら美咲の右手を握る亮介。

2人の様子を見て、飛び跳ねる円。

### ○マンション『サンハウス』・玄関前

円と合流する美咲と亮介。

円「おっそーい！」

亮介「ごめん、ごめん」

美咲「さあ、うちに帰ろうね」

円「うん！」

ふと、空を見上げる円。

円「(空を指さし)あ！」

美咲と亮介も空を見上げる。

青い空に真っ直ぐに伸びる飛行機雲。

亮介「お、飛行機雲！」

美咲「きれい！」

円「ながーい！」

青空にどんどん伸びていく飛行機雲。

飛行機雲を目で追う、笑顔の美咲達。

楽しげな声が空に響き渡る。(終)